

■ 書 評



予防精神医学—脆弱要因の軽減とレジリエンスの増強—

小椋 力 著

星和書店

2016年5月 280頁

本体価格 2,900円+税

本書は、予防精神医学の概念をわが国にいち早く導入し、発展させてきた第一人者による集大成ともいえる書であり、予防精神医学の国内外の現状が、わかりやすく網羅的に解説されている。第1章 予防精神医学では、予防の定義、概念、モデルについて述べられ、予防の重要性と必要性が説明されている。第2章 予防精神医学の歴史では、国内外、特にわが国の予防精神医学の歴史について、第3章 精神障害の予防に関する費用対効果では、医療経済的に精神医学領域の予防対策・予防活動が費用に対して効果が大きいことが具体的に詳しく説明されている。第4章では精神障害の予防と倫理問題について、第5章・第6章では精神障害の発症や病勢の進行に影響を及ぼす脆弱要因や防御・回復要因（レジリエンス）、第7章では主な精神障害・病態の予防が取り上げられている。第8章では、家庭・学校・職場・地域などの領域における精神保健や予防対策、特に児童青年精神医学の進展の必要性や、改正労働安全衛生法に基づき2015年12月に施行された「ストレスチェック制度」の導入にともなう職場における早期発見・早期治療の体制、地域における自殺対策、認知症対策などについて、そして第9章では、心理社会的介入・治療を中心とする早期治療・再発予防のための治療法について、述べられている。

著者は、長年、日本の予防精神医学をリードし、その取り組みは、近年著しく進展しているわが国の予防精神医学の歩んできた歴史に常に影響を与えてきた。著者は、1996年沖縄コンベンションセンターで開催された第16回日本社会精神医学会

で会長を務め、わが国の学会で初めて「統合失調症の予防」に関するシンポジウム「社会精神医学における新しい戦略—精神分裂病の予防の可能性」を開いた。このシンポジウム関係者が集まり日本精神障害予防研究会（現、日本精神保健・予防学会）が立ち上げられ、2001年の学術集会は第1回日本国際精神障害予防会議として、この領域をリードする国内外の多数の研究者の参加のもと沖縄コンベンションセンターで開催された。このころ、本書と同じ星和書店から著者が編集した「精神障害の予防をめぐる最近の進歩」が出版され、精神障害の予防に関する国内外の100を超える研究報告を掲載し、様々な領域・職域から予防に関する当時の最前線が紹介されているが、各研究タイトルには、「精神分裂病」「痴呆」など、「統合失調症」や「認知症」に呼称変更される前の病名がならび、この10数年間の精神医学を取り巻く状況の変化の速さや大きさを再認識させられる。

本書はどの章も概念や概観、歴史などについて述べられた後、各章の最終節「おわりに」でまとめられ、また最終章「おわりに」では、本書全体がまとめられており、どこから読んでも理解しやすい構成になっている。評者は児童青年精神医学を専門としているため、第8章から読み始めたが、出生前から幼児、学童期に至るまでの様々な精神医学的問題に対する精神保健や予防に関して、歴史的な背景だけでなく、昨年出版されたばかりの最新の研究も紹介されている。

本書全体を通して、予防精神医学においても、各疾患の病態解明ならびに病態に応じた的確な発症予防が可能な障害の発見、児童精神医学の進展、さらには家庭・学校・職場・地域における精神保健システムの構築および対応できる技術を有する人材育成が重要な課題になることなど、精神医学の将来的な方向性について考えさせられた。著者の夢を引き継ぎ「精神障害の発症率、有病率の低下」を現実のものとするために、私たちの世代で解決すべき課題はまだまだ大きいと、改めて身が引き締まる思いをさせられる。

(高橋秀俊)